

# 若手がすすめる、地方創生

北海道大学公共政策大学院

2016年12月11日、北海道大学公共政策大学院主催による地方創生シンポジウム「若手がすすめる、地方創生」が、北海道大学で開催されました。運営を担当したのは学生団体のHALCC（以下ハルク）※1で、11月に津別町で行ったフィールドワーク報告のほか、同大学院の小磯修二特任教授の基調講演、地方創生で活躍している方々と学生による意見交換を行いました。

## 開会あいさつ



吉田 匡克  
北海道大学  
公共政策大学院2年

ハルクの代表を務めている公共政策大学院2年の吉田匡克です。ハルクは、若者が地方創生について考える機会を作ろうと立ち上げた団体です。多くの皆様のご協力をいただき、本日のシンポジウムを開催することができました。地方創生のヒントを見つけられるようなシンポジウムになれば幸いです。

## 基調講演

### 地方が輝くために

日本の地方には、空間の格差があります。東京という大都市と距離が離れていることが、地方にとって産業やビジネスのハンディとなっています。しかし、地方でも、一定の生活の豊かさを維持し、その中で国全体の発展を考えていくことが必要です。また、地方には大都市にはない魅力があります。大都市は扱う仕事の規模は大きいでしょうが、一人ひとりの仕事は歯車の一つに過ぎません。一方で、地方では自らの



小磯 修二  
北海道大学  
公共政策大学院特任教授

仕事が地元還元されていると感じることができません。たった一人でも、地域を変えることができるのが地方の醍醐味だと思います。

若者を呼び込むには、地方の立場に立った戦略が必要です。そのためにも地方の視点でしっかり分析をして、地域への生産誘発効果を生むような力強い産業構造を構築していくことが重要でしょう。

## 津別町でのフィールドワーク報告

ハルクのメンバーは16年11月に3泊4日で津別町を訪問し、観光、特産品、教育の3班に分かれて現状調査を行い、それをもとに具体的な政策提言を行いました。各班の報告を紹介します。

### 観光班「観光拠点整備と滞在時間延長に向けて」

津別町の観光産業が現在抱える課題として、①PR不足、②観光資源が点在し孤立していること、③冬場の客足が鈍いことがあります。

PR不足については、「道の駅 あいおい」の観光拠点化を提言しました。道の駅ではクマヤキ※2が人気で、急速に客足が伸びています。クマヤキ目当てに訪れた観光客に、ほかの観光資源もPRするため、PR動画を放映するモニターの設置、木製装飾や木材加工品の導入による木材の町としてのPR、屋外にあるクマヤキ販売所を駅内に移設することを提案しました。

観光資源の孤立化に対しては、観光資源をつなぐス

※1 HALCC（ハルク）

2016年3月に津別町まちづくりコンペに参加したことをきっかけに、北海道大学公共政策大学院の吉田匡克、横田淳一郎、菩提寺凌、川合翔太が立ち上げた学生団体。Hokkaido Academic Local Creation Conferenceの略で、学生の視点で地方創生の可能性を提言していこうと発足した。11月にはハルクのメンバー18人が津別町を訪れ、観光、特産品、教育の3分野の提言を行った。

※2 クマヤキ

クマの形のたい焼き風菓子。商標登録されており、道産小麦粉、豆乳、地元産小豆を使っている。津別町発祥の菓子で、津別町の「道の駅あいおい」で購入できる。

トリーづくりによるPR効果の増大と、リピーター創出が必要と考えました。そこで、津別町の観光地を巡る「津別周遊スタンプラリー」と、曜日ごとの観光マップ「日刊つべつ ぶらり新聞」を作成し、観光客にまちを巡るインセンティブを付与し、情報発信を行うことを提案しています。

冬季の観光資源不足については、町内で行われているアイスクャンドル点灯まつりの拡大と写真スポットの設置を提言しました。アイスクャンドルを各所に設置することでロマンチックな雰囲気を演出し、PR動画の風景を写真スポットとして整備することで、観光客を呼び込めるとしています。

### 特産品班「特産品を通じ津別のことを発信する」

特産品班ではSWOT分析<sup>※3</sup>を行い、津別町には名物クマヤキや、木材資源による高品質な木材加工製品、安心・安全な農畜産物という強みがある一方、広報力の欠如やネット環境の未整備といった弱みが存在するという結論に達しました。

分析を踏まえて、まずクマヤキをどう広めていくかを考えました。客層を地元のカップルや家族に限定し、クマヤキのバリエーションを増やします。販売所をオホーツク圏に拡大して知名度アップを狙い、最終的にはクマヤキランドを町内に作って、地元特産品を販売することで、まちの発信拠点とすることを提案しました。また、学生が運営主体の「HALCC×津別町～出前販売」として、札幌などで津別町の特産品を定期的に出張販売し、認知度アップを図りながら学生からの新たな視点や発見を津別町に還元できると考えています。

全国的に人気が出た特産品があっても、地元で根付いていなければ、一過性の人気に終わってしまいます。まず地域の人々に愛される商品に育てて、その上で町外へ進出し、町外で獲得した人気をまちに還元されていくようなプロセスを踏むことが、成功への鍵になると思います。

#### ※3 SWOT (スウォット) 分析

企業の全体評価を行うための分析手法で、強み (Strength)、弱み (Weakness)、機会 (Opportunity)、脅威 (Threat)の四つの視点から評価を行う。

### 教育班「津別高校の存続のために」

津別町内には、経済的・時間的な制約から津別高校にしか通うことができない生徒がおり、高校の存続が望まれています。また、町内唯一の高校が消滅すると、小学校から高校までの一貫した教育インフラが欠如することになり、まちへの影響が大きいと考えられます。

津別高校には、小規模ならではの個別指導や海外研修制度などの魅力的な制度が存在します。しかし、津別中学校の卒業生の多くは近隣市町村にある高校に進学しています。その理由として、①津別高校の多様な制度の知名度不足、②過去の悪いイメージの残存という課題がネックになっていると考えました。

津別高校の多様な制度の知名度不足に対しては、PRの強化が必要です。その方法として、町民に配布される広報誌や新聞、オホーツク管内の地域紙による広報と、中学生がよく訪れる施設にポスターやパンフレットを設置する活動を提案します。提案を受けて、すでに図書室に津別高校のパンフレットなどを置いていただく了承を得ています。

過去の悪いイメージを払拭するためには、高校生と地域住民の交流の場を増やすことが重要で、現在の高校生の姿を住民に知ってもらうことを提案します。津別高校ボランティア局と既存のボランティアサークル「ひまわり」の活動を足掛かりに、津別高校の全生徒が地域住民と接する機会を作りたいと考えています。

### パネルディスカッション

吉田 行政・民間・研究の立場で地方創生に携わってこられた皆さんから、地方創生が抱えている課題と今後の対応策をお聞かせください。

中村 人口減少対策はこれまでも各地で取り組んできました。それでも人口減少が止まらなかったのは、人材とその



中村 昌彦 氏  
北海道総合政策部  
地域創生局地域戦略課  
地域創生担当課長

やり方にも課題があるのではないかと感じています。専門性を持った人材を活用し、官民で取り組むことが必要です。今後は民間の専門人材と地方のマッチングを進めていきたいと考えています。



松嶋 一重 氏  
株式会社政策投資銀行  
北海道支店長

**松嶋** まち全体が一体化することが課題の一つです。例えば、農業の栄えているまちでは、農業者はほかの産業と連携をする必然性がなく、協力に消極的な場合もあります。しかし、まちはさまざまな産業やインフラが複合的に交わって形成されています。あ

らゆる産業や多くの住民の協力が不可欠で、その協力体制をどのように築いていくのが重要です。

**小磯** 地方は各団体の縦の絆が強く、横断的な協力を形成することが困難なことがあります。しかし、団結が地域活性化につながることを認識すると、その後の行動力には目を見張るものがあります。学生や若者には、地域住民に対し団結の重要性を説得する力を身に付けてほしいと思います。



服部 立夏  
北海道大学  
法学部2年

**吉田** 服部さんは学生として今回の活動を通して何が重要であると感じましたか。

**服部** 私は観光班で活動しましたが、調査でうかがったヒアリング先の皆さんは、地方創生にポジティブな方ばかりでした。彼らを統率してリーダーシップを発揮できる人がいれば、津別町の閉鎖的な要

素を打開できると感じました。

**吉田** 学生に限らず、若者が地方創生にどのように関わっていくべきか、お考えをお聞かせください。

**中村** 行政とともに地方創生に関わっていく際は、目的や動機が明確で、組織化されていることが重要です。また、地域のニーズに応えられるだけのスキルがあれば、地域活性化に結び付くと思います。

**松嶋** さまざまな若者が世代を代表して意見を発信することは地方創生において大切なことです。ハルクのような団体が、こういった形で関与していきたいのかを示した上で、自治体と一緒に地方創生に取り組んでいくことが有効だと思います。

**小磯** 地域と関わっていく上で活動の継続性は重要な観点ですが、それにこだわると学生の良さが失われてしまう可能性があります。学生の活動の限界も認識しながら、受け入れる地域と一緒に柔軟な関係を構築していくことが必要だと思います。

**横田** 院生4人でハルクを立ち上げ、津別町でのフィールドワーク、そして今日のシンポジウムと活動を続けてきましたが、僕らは春に卒業してしまいます。継続性については、学生が団体を運営していく上で、いつかぶつかる壁だと思います。そこで、学生に限らず、さまざまな方の支援をいただきながら、活動を継続していける仕組みを考えていくことが必要になってくるように思います。

**吉田** 本日は、貴重なご意見をありがとうございました。



横田 淳一郎  
北海道大学  
公共政策大学院2年

